

# 短歌（十八）

下田 明美

日常は厭きてしまった、旅に出て

探してみたい、非日常の国

すずらんの花見ていると鐘がなる

学芸会のウサギの母親

食べきれず畑に残った春菊が

黄色の花を咲かせてそよぐ

はらはらと白い花びら散っている

夏に咲いても空木は哀しい

寝る前に捕まえておくしつかりと

夢見ることが好きな心を

語りかけ、深呼吸して仰ぎ見る

あまりに青い、五月の空は

桃色のカリンの花はみずからの

青葉・若葉に守られている

伊豆半島、流されて来た訳でない

逃げて来たのだ都会の街から

一日の生活終えた祖母が言う

「寝てこそ楽をしようけれか」と

サイ投げた、決断したと思っても

ブーメランのよう、還るものあり

紫陽花が私の庭で咲いている

行くことはない、明月院に

解体が終わった先に現れた

緑のスペース巢雲山まで

腰痛で八重洲口を歩いてた

すれ違いざま「身障者か」と

ぱったりと水泳の友と駅前で

一年泳がず、どうしていたの？

ドーナッツ、食べたいのだが叶わない

車の無い身にパン屋は遠い

